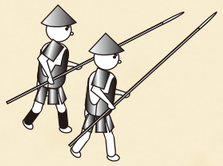
高良山の山城



毘沙門岳城（びしゃもんだけじょう） －高良山最高の立地－

高良山山頂（標高 312m）に位置する。「別所城」とも呼ばれた。南北朝時代の延文（えんぶん）４年（正平４・1359）、筑後川合戦に際し、懐良（かねなが）親王が拠点にしたと伝わるが、築城者・築城時期は不明である。立地から、高良山座主（ざす）や高良山勢力を麾下（きか）に置いた大友方の武将が陣を敷いたとも考えられる。

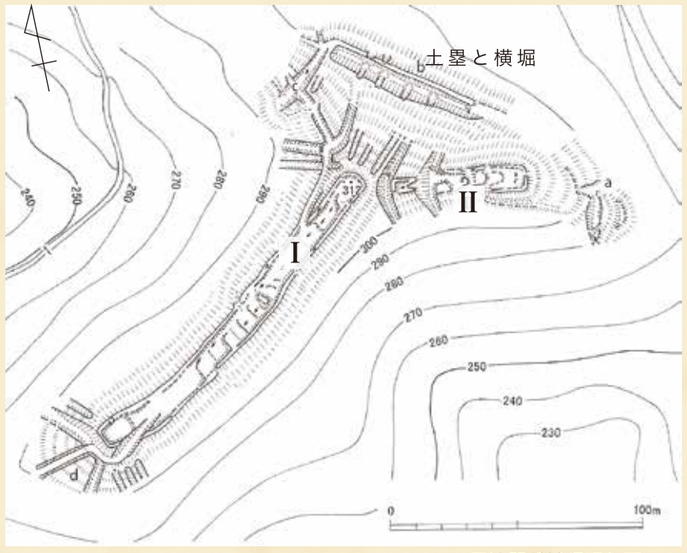
高良山山頂に主郭（しゅかく）を置き、南西方向へ延びる尾根上で、長さ約 150m、幅約 15mの曲郭（くるわ）Ⅰを配している。また、主郭から東側尾根上に曲郭Ⅱがみられる。

曲郭Ⅰには、土塁（どるい）が巡らされ、造成された階段状の平坦面も確認される。山頂の東側と北西側に堀切（ほりきり）、北側斜面には３本の竪堀（たてぼり）が設けられている。

土塁と横堀

さらに下方では、この堀切及び竪堀群に派生する畝状空堀群（うねじょうからぼりぐん）に接して、長さ約 50mにわたる横堀（よこぼり）が土塁を伴って構築されている。斜面すぐ下は、久留米つつじ公園にあたる。南西側にも堀切と竪堀群が設けられている。

曲郭Ⅱにも、堀切の前後に土塁がみられる。

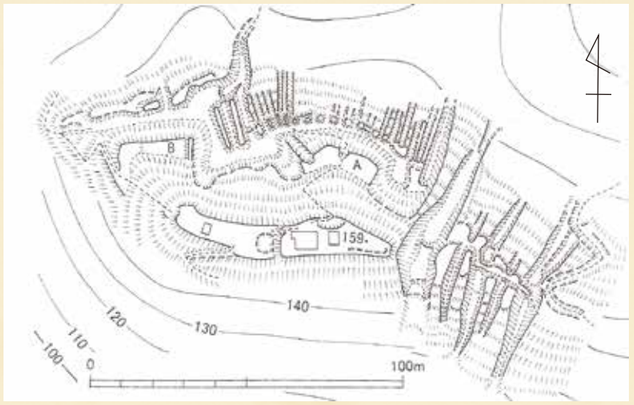


毘沙門岳城縄張り図

鶴ヶ城（つるがじょう） －壮観！連続する堀切群－

毘沙門岳城から北西へ延びる尾根の突端頂部に位置する。杉ノ城との間には谷が入り組んでいる。「舞鶴城」とも呼ばれた。

標高 159mの頂部に東西約 30m、南北約 15mの主郭を置き、すぐ西側に一段下がって同規模の曲郭を配す。全長は 200mに満たない。周辺の山城に比べ小規模な造りであるが、横堀を伴う畝状空堀群、東側尾根筋を遮断する堀切の連続にいくつかの土橋も見られ、山城遺構の醍醐味が詰まっている。



鶴ヶ城縄張り図

杉ノ城（すぎのじょう） －必見！畝状空堀群・石垣－

毘沙門岳城から西へ延びる尾根上に位置する。「住厭（すみあき）城」とも呼ばれた。南北朝時代、菊池氏が籠城（ろうじょう）したとも伝わるが、来歴ははっきりしない。高度な設計により防御に優れ、築城の契機や近接する毘沙門岳城との関係など、関心は尽きない。

城の規模は、東西約 450m、南北約 60m、東西２か所の頂部（標高 304m・294m）を中心に、それぞれ曲郭Ⅰ・Ⅱが展開しており、北側斜面に多くの防御施設が配されている。

特に、曲郭Ⅱでは、北側に土塁と横堀が巡らされ、その下方に約２m間隔で設けられた 30 本足らずの竪堀が、畝状空堀群を構成する。この周辺では、石垣もいくつか確認でき、見所である。

杉ノ城縄張り図

吉見岳城（よしみだけじょう） －高良山防御の最前線！！－

毘沙門岳城から北西へ延びる尾根を下った吉見岳山頂（標高 158m）に位置する。「吉見嶽城」「芳水嶽城」とも称される。築城時期等は不明であるが、天文２年（1533）に八尋式部が居城とし、天正 15 年（1587）には豊臣秀吉が陣を置いたと伝わる。

吉見岳山頂の曲郭Ⅰは、東西約 50m、南北約 20m、周縁に土塁が巡る。西端からの展望がよく効き、立地から高良山の最前線基地ともいえよう。東側は土塁がよく残り、その下方には幅約 10m、深さ約 10mの大型の堀切が設けられている。曲郭Ⅰの西側下方に、東西約 70m、南北約 20mの曲郭Ⅱが構築されている。

城跡は、江戸時代、高良山 50 代座主寂源僧正（じゃくげん）が天和３年（1683）に選定した「高良山十景詩歌」に桜の名勝として詠まれており、現在、琴平宮が祀られている。また、周辺には江戸時代以降の墓地や、高良山座主の邸宅跡も伝わる。

吉見岳城縄張り図

山城の施設

郭（曲郭）（くるわ）

地形を平坦に造成した一区画のこと。山城では、最も高いところに主郭（本曲郭）を置いてそこから階段状に二の曲郭、三の曲郭などを配置することが多い。また、主要な曲郭を補うために、帯曲郭・腰曲郭などの小曲郭がおかれる。

堀切（ほりきり）

曲郭の防御のため、尾根筋を断ち切るように設けられた堀。

竪堀（たてぼり）

敵の横方向への斜面移動を阻止するために等高線に対して直角に設けられた堀。曲郭の直下に竪堀を連続して並べたものを畝状空堀群（うねじょうからぼりぐん）という。

横堀（よこぼり）

曲郭の防御力を高めるために、等高線に沿って掘られた堀

土塁（どるい）

曲郭の防御力を高めるため縁辺部に設けられた堤防状の盛り土

※縄張り図は「福岡県の中世城館跡Ⅳ －筑後地域・総括編－」福岡県文化財調査報告書第 260 集　2017　福岡県教育委員会より引用・改変